

『元音統韻』未収の部分について

——『皇極統韻』「字有三合曲有四合」を中心に——

浦 山 あゆみ

はじめに

明・陳蘆謨（字は猷可または益謙，号は礪庵または澄真子，嘉興秀水の人⁽¹⁾）の『元音統韻』（以下『元音』）は，門人・知人たちがその元となる『皇極統韻』（関本。以下『統韻』）を改編し梓行した書物である。『統韻』が編まれたのは順治十八（1661）年頃と考えられ，予定では全二十四巻であったことがうかがえる（ただし，全巻刊行されたかは不明であり，現在，河南省図書館に『統韻』の一部（巻一・巻三・巻十八）が蔵せられることのみ確認できる）。その後，著者の陳蘆謨は世を去り，『統韻』の原稿を預かった同郷の門人胡邵瑛（字は合一）も諸事情により刊行できぬまま亡くなった。胡氏の遺志を継いだのが知人の范廷瑚⁽²⁾である。胡氏臨終の際に原稿を託された范氏は，他の学者たちとともに三年の歳月をかけて編纂しなおし，巻末に呉仁臣の『字彙補』六巻を附して増やし，全二十八巻とした。こうして『統韻』は編みなおされ，書名も『元音統韻』と改めて世に出された⁽⁴⁾。

書物が著者以外の人の手により編みなおされる場合，一般的には増補される傾向にある。『統韻』の場合も『元音』へ編みなおされる際，巻末に『字

(1) 陳蘆謨の事績等については馮錦榮2007が最も詳しい。なお，拙稿2014にて陳氏の卒年を誤って「康熙二十四（1685）年～三十一（1695）年頃」としたが，正しくは「康熙二十四（1685）年～三十一（1692）年頃」である。謹んで訂正する。

(2) 具体的には拙稿2014参照。

(3) 『元音』によれば字は君重，三韓の人。

(4) 簡忌浮2009によれば，『元音』は二度刊刻されている可能性がある。第一次は潘序に示された康熙四十七年（1708），第二次は范序の康熙五十三年（1714）であり，二次に范氏が『字彙補』を附したとする（p388）。

彙補』六巻が増補された。いっぽうで、逆に削除されたと思われる部分もある。しかし、『統韻』が闕本で巻一・巻三・巻十八のみしか残されていない以上、どの部分が増補され、どの部分が削除されたのかを全て対照し比較することは難しい。確実に『統韻』では存在し、『元音』では存在しない部分と認められるのみの検討となるが、そこからいくつかの問題が提起される。

そこで本稿では、『元音』を編纂する際に削除されたと考えられる部分——すなわち確実に『統韻』には存するが、現有の『元音』未収の部分——を検討することとし、『元音』にみられる問題点と、その部分がなぜ『元音』で載せられなかったのかについて、論じてみようと思う。

一 『元音』未収の部分等について

『統韻』巻一所収の「総目」には、書物の内容（陳氏の構想であり、後に出版を予定していた内容であって、実際に刊行されたかどうかは未詳）を示す詳しい條目が残されている。これについてはすでに一覽表にまとめ、『元音』⁽⁵⁾「総目」所収の條目と比較できるようにして示した。この一覽表からわかることは、『元音』では、新たに編みなおす際に二種の序文（潘応賓序と范廷瑚序）へと変わったこと、「五音辨」（『元音』「総目」に條目が見え、本文そのものはおそらく直前の「貞下起元」に併合）「稽往」「書断」（ともに『元音』巻二）と、呉仁臣著『字彙補』（『元音』巻二十三～巻二十八所収）が増補されたことである。

いっぽう、現存の『統韻』所収で『元音』未収の部分は、『統韻』の序文二種（曹引と姚序）・「字有三合曲有四合」「六書」「指事」「象形」「形声」「会意」「転注」「假借」（以上は『統韻』巻一）、それに李登著「正隸疏」（『統韻』巻十八）である。また、『統韻』「総目」の條目に見え、『元音』「総目」條目に無いものは、「刪字」（『統韻』巻十六）・「正篆疏」（『統韻』巻十七）・「曲韻」（『統韻』巻二十三～巻二十四）である。上文でも触れたように『統韻』は闕本であるため、これら『統韻』「総目」の條目のみに見える部分は、そもそも実際に存在したのかどうかさえ明らかではない。つまり、『統韻』巻一の末尾に収められる「字有三合曲有四合」「六書」「指事」「象形」「形声」「会意」「⁽⁶⁾転注」「假借」と巻十八の李登著「正隸疏」だけが、確実に『統韻』に存

(5) 拙稿2014表一（『皇極統韻』『元音統韻』総目比較一覽表）参照。

在し、『元音』には無い部分といえる。⁽⁷⁾

上述の『統韻』にのみ存する部分のうち、巻一「釈原」末尾にある「字有三合曲有四合」「六書」「指事」「象形」「形声」「会意」「転注」「仮借」は、連続する部分であるため、何らかの事情により『元音』を編纂する際にはこれらの原稿が欠落していた可能性も否めず、一概にある意図を持って削除されたとはいえない。しかし、本稿では削除されたと仮定しておく。その理由は以下に述べる如く、『元音』編纂の方法にある。

既に指摘したことだが、実は『統韻』「自叙」（以下「自叙」とする）と『元音』「自序」（以下「自序」とする）には文章の異同がある。⁽⁸⁾具体的には「自序」三葉表の「毫無」までは同じで、三葉裏から少し異なっている。以下、異なる部分のみを抜き出し対照する。

表一 『統韻』『元音』陳氏序文対照表

『統韻』「自叙」	『元音』「自序」三葉裏
(毫無) 段於造作者也。余畱心此道三十餘年、將謂造化斯民不負天付此知識尔。今老矣、口齒疎豁、耳目迷茫、手足頑頓、奚容塵篋、聽其淪胥已也。因付梓人以公於世、後必有鼓舞興起、是其所是、非其所非、出而善世、如余者憶史氏焦弱侯 ⁽⁹⁾ 之言曰、…(中略)…余乃集三家之所長、補經世之所缺、歸於天然同然成茲、皇極統韻七音經緯、與律呂相表裏…(中略)…構李後學陳蓋謨自叙	(毫無) 矯強于其間也。憶焦弱侯之言曰、…(中略)…余乃集三家之所長、發皇極之所祕、歸於天然同然成茲、元音統韻七音經緯、與律呂相表裏…(中略)…構李陳蓋謨自序

「自叙」にいう「三十餘年」とは、陳蓋謨が最初に編んだ音韻学の書である『皇極函韻』（崇禎五（1632）年叙。以下『函韻』）から約30年と考えられ、おそらく順治から康熙年間のはじめ頃、つまりこの「自叙」は陳氏が七十歳頃に書いた文章と推される。この「自叙」から陳氏が老いを理由に刊刻を決

(6) 拙稿2014表一の『統韻』の中の㉗～㉘

(7) 厳密にはこれら以外にも細かな箇所において『統韻』と『元音』には異なる文章が存在する。

(8) 拙稿2014注34でも触れた。

(9) 焦弱侯は焦竑（嘉靖十九（1540）年～万曆四十八（1620）年）、弱侯は字、号は澹園または澹園。焦太史とも呼ばれる。江寧（現在の南京市）の人。

意したことが看取されるが、この後彼は九十歳頃まで生きたことが確認できるため、⁽¹⁰⁾ いったん上梓した後もさらに補う機会が充分にあったであろう。

『元音』巻二「通釈下」の「稽往」にも「謾作皇極圖韻距今幾六十年」とあり、その後も少しずつ加筆していた状況を示している。⁽¹¹⁾

このことは、盛楓著『嘉禾猷録』の二種のテキストからも確認できる。上海図書館蔵『嘉禾猷録』巻四十七には、

蓋謨，字獻可，號礪菴，晚號激眞子，少有才名爲諸生。國破，凌棄諸生，閉戶讀書，精考聲韻・占候之術，皆有心巧濟以成法類，非世人所得窺，其于星象度數毫髮不爽，年九十餘而卒。所著書子孫皆寶祕，無流傳者。惟通釋皇極統韻一書梓行。⁽¹²⁾

とあり、ここにいう「通釋皇極統韻」はおそらく『統韻』「通釈」を指すと考えられる。南京図書館蔵の『嘉禾猷録』巻四十六では、陳蓋謨の事績を書き足し、また末尾に「皇極統韻若干卷」と記す。このことは、陳氏がまず『統韻』「通釈」のみを梓行し、その後も手を加えて徐々に書き上げていき、「通釈」以外の部分も順次世に出されたことを示すと考えられる。後に梓行されたのは「通釈」部分だけではなくだったので、盛楓は「皇極統韻若干卷」と書き換えたのであろう。現在の『統韻』に巻一と巻三・巻十八が確認されるのは、「通釈」だけではなく複数の巻が発刊されたことを裏付けている。ただし、これだけでは全巻刊行されたか否かまでは分からない。陳氏の構想では全二十四巻だが、二十四という数字は「若干」とはいえないであろう。

以上をまとめると、『統韻』は当初「通釈」部分が先に刊行され、さらに書き上がったいくつかの部分（巻三や巻十八。これら二巻以外にもあった可能性も含む）も逐次上梓されたが、全て梓行されたどうかは不明である。最終的に陳氏が補い続けた原稿は門弟の胡合一に託され、さらに胡合一から託された范延瑚が、その後『元音』を出版した頃——「自叙」が記された順治か

(10) 拙稿2014注(6)参照。

(11) 五十七葉表。上記の如くこの「稽往」部分は『元音』にのみあり、『統韻』「総目」には見えない項目である。

(12) 盛楓は陳氏と同じく秀水の人。封治国2013によれば、盛楓（1661—1709）、字蘭宸，号丹山。『清史稿辞典』には「康熙二十（1681）年举人」とある。

ら康熙年間のはじめ頃から30年ほど——には相当の年月が経っていたうえに、陳氏自身も逝去したため、「自叙」の一部の文章は実際の年数や状況とは合致しなくなった。このために『元音』の編者たちは「後學」の二文字とともに符合しない文章も削り、その際に書名も改めた可能性が高いと思われる。

二 『統韻』所収の文字学にかかわる部分について

本章では『統韻』所収かつ『元音』未収の部分のうち、特に文字の成り立ちに関する箇所について見ていくこととする。具体的には「字有三合曲有四合」「六書」「指事」「象形」「形声」「会意」「転注」「仮借」のうち、「字有三合曲有四合」の部分は、主として漢字の音節構造について論じており（次章参照）、それ以外の「六書」「指事」「象形」「形声」「会意」「転注」「仮借」の部分（以下「六書～」とする）は文字学に関する部分である。諸制約により抄写できなかったものの、ごく大まかにいえば趙宦光の『六書長箋』⁽¹³⁾の説を紹介し要約したものと見えよう。このことは、「六書～」に続く最後（『統韻』巻一「積原」末尾、すなわち「積法」の前）に、次の記述があることから分かる。

右凡夫之論，六書漢義簡當至矣。其詳言之者更有七卷。鄭魚仲有言，六書明則六經如指掌⁽¹⁵⁾。今茲之論止挈大綱，未窺門戶者，讀之茫如。但茲集已屬浩繁，未能多載。將有統韻篆一書，祖統韻小篆，而附古籀等篆於下。其細攷六書，與篆相近，由篆而隸，點畫益明，聲音益當，實與茲集相表裏。今故約言之如此。

ここから陳氏は「篆」にかかわる詳しい論考（具体的には『統韻篆』という書または巻）を別に予定していたことがうかがえる。それが完成したのかどうか不明であり、『統韻』巻十七「正篆疏」（欠）との関連も審らかでない。

(13) 明・嘉靖三十八（1559）年～天啓五（1625）年の文字学者、字は凡夫、江蘇太倉の人。篆書に精しく、『説文長箋』『六書長箋』『九圍史図』『寒山蔓草』等の著書がある。陸卿子（趙宦光の妻）とともに、寒山に隠棲した。

(14) 『六書長箋』全七巻。万曆三十六（1608）年自序。『説文長箋』と合刻され、『六書漢義』とも題される。

(15) 鄭樵『通志』巻三十四「六書略四」假借第六

(16) 拙稿2014参照。

また、李登の論著に対する注釈書である「正隸疏」（『統韻』巻十八）とのかかりも未詳である。¹⁷⁾ 現行の『元音』に「篆」にかかわる巻を欠くこと、また、『元音』巻之二の末尾に「書断」が加えられ、字体について述べられていることから、『統韻』の「六書～」など文字学に関する記述は、この「書断」へ集約された可能性がある。

三 「字有三合曲有四合」について

次に、文字論とは異なる内容の「字有三合曲有四合」の部分について取り上げる。はじめに「字有三合曲有四合」について、執筆の経緯を大まかに解説しておく。

陳蓋謨は『統韻』より前に、まず『図韻』を著した。『図韻』は現在、河南省図書館に蔵され、『統韻』と同帙に入れられるが、成書年は異なる。ちなみに、影印されて『四庫全書存目叢書』に収められているのが、河南省図書館本の『図韻』である。『図韻』を見た沈寵綏が『度曲須知』巻下「経緯図説」に、陳氏『図韻』の「四声経緯四図」¹⁸⁾に利用方法の解説を加えて転載した。そして陳氏『図韻』の「経緯省括図」の方は曲韻に合う形に若干改編し、「転音経緯図」としてやはり『度曲須知』に収めた。陳氏は『度曲須知』に引用された自身の二種の韻図（「四声経緯四図」と「転音経緯図」）とその利用方法をみて啓発され、自身の「四声経緯四図」「経緯省括図」を更改し、『統韻』に新たな「四声経緯四図」「経緯省括図」を載せた。その際に沈氏の『度曲須知』に対する所見として書かれたのが「字有三合曲有四合」の部分といえる。

『度曲須知』と『統韻』には各々互いの意見に対する応酬が看取され、特にこの「字有三合曲有四合」には『度曲須知』「経緯図説」「転音経緯図」に

17) 「正隸疏」は『正字千文』に基づく著である。陳氏「授」、張九錫「疏」、沈応瑞「較」。

18) 沈寵綏（?～1645頃）、字は君微、号は適軒主人、呉江の人。『度曲須知』は沈氏の論曲書。中国古典戲曲論著集成本『度曲須知』の「提要」によれば、陳蓋謨の生前に刊行された『度曲須知』のテキストには、崇禎十二（1639）年原刻初印本と順治六（1649）年『絃索辨訛』合印本の二種があるという（『四庫全書存目叢書』所収本は北京大学図書館蔵の崇禎本）。『四庫全書存目叢書』所収本と中国古典戲曲論著集成本では文字の異同が若干あるため、本稿では両テキストを参照し、基本的には『四庫全書存目叢書』所収本にしたがった。

19) 図は「平声経緯図」「上声経緯図」「去声経緯図」「入声経緯図」の四種。

対する陳氏の見解が提示される。

さて、陳氏と沈氏との間でなされた以上の経緯を踏まえた上で『統韻』の「字有三合曲有四合」の内容を見てゆくこととする。諸々限られた状況での抄写のため誤読脱字等をおそれるが、公にすることにより博雅の御示教を願う。なお、句点は原本の通りである。

字必三合。前已詳言之矣。²⁰就沈君徵論曲者。益相發明。其畧曰。凡敷衍一字。各有字頭字腹字尾之音。凡字音始出。各有幾微之端。似有如無。俄呈忽隱。於蕭字。則似西音。於江字。則似幾音。於尤字。則似移音。此一點鋒芒。乃字頭也。²¹若今人唱離字樓字陵字。恆有一兒音冒於其前。又如唱一那字。則先贅一舐腭之音。此俗所謂裝柄。極欠乾淨。可名曰字疣。不可誤認爲字頭也。²²凡出字後。勢難遽收。中間另有一音。爲之過氣接脈。如東鍾之腹。厥音爲翁紅。²³陰腹爲翁。陽腹爲紅。下做此。先天爲煙言。²⁴愚按言當作賢。皆來爲哀孩。尤侯爲侯歐。²⁵當爲歐侯。寒山桓歡爲安寒。²⁶寒山爲安寒。桓歡當爲廻桓。餘則有音無字。未便描寫。皆所爲字腹也。繇腹轉尾。方有歸束。今人認腹音爲尾音。唱到其間。皆無了結也。²⁴收音訣云。曲度庚青急轉鼻音。江陽東鍾緩入鼻中。模及歌戈。輕重收鳴。蕭豪尤侯。也索鳴收。魚模之魚。厥音乃子。皆來齊微。非于是噫。先天眞文。舐舌舒音。寒山桓歡。亦舐舌端。音出侵尋。

20 「字必三合」は拙稿2014表一『統韻』20（『元音』23）に見える條で、字音の発声法について説かれている。

21 『度曲須知』上巻「收音問答」二十八葉裏「余曰：『凡敷衍一字，各有字頭，字腹，字尾之音。』」

22 『度曲須知』上巻「收音問答」二十九葉裏～三十葉表「曰：『凡字音始出，各有幾微之端，似有如無，俄呈忽隱，於蕭字則似西音，於江字則似幾音，於尤字則似移音；此一點鋒芒，乃字頭也。』」『統韻』と異同がある文字に下線を引いておく。以下同じ。句読点等は古典戯曲論者集成本による。）

23 『度曲須知』上巻三十葉表「收音問答」に「今人每唱離字，樓字，陵字等類，恆有一兒音冒於其前。又如唱一那字，則字先預贅一舐腭之音，俗云『裝柄』，又云『摘鉤頭』，極欠乾淨，此又可名曰『字疣』，不可誤認爲字頭也。」

24 『度曲須知』上巻二十八葉裏～二十九葉表「（頭尾姑未盡指，而字腹則）出字後，勢難遽收尾音。中間另有一音，爲之過氣接脈，如東鍾之腹，厥音爲翁紅；陰腹爲翁，陽腹爲紅，下做此。先天之腹，厥音爲煙言；皆來之腹，厥音爲哀孩；尤侯之腹，厥音即侯歐；寒山，桓歡之腹，厥音之腹，厥音爲安寒；餘則有音無字，未便描寫，皆所謂字腹也。繇腹轉尾，方有歸束，今人誤認腹音爲尾音，唱到其間，皆無了結。」

また『度曲須知』上巻「字母榘剛」にも似た内容の箇所がある。「字頭難以枚舉，而腹音之在東鍾者，陰則翁而陽則紅，在皆來者，陰則哀而陽則孩，在眞文者，陰則恩而陽則痕，在先天者，陰則煙而陽則言，推之各韻，其腹皆然。」（三十三葉裏～三十四葉表）

閉口謳吟。廉纖監咸。口閉依然。車遮之音。遏叶平聲。若問支思。反切醫詩。唯有家麻。音切哀巴²⁵。此所謂字尾也。愚按君徵論曲。實出獨得三十年來曲家始知有字頭字腹字尾之論。儒者呻其咕嚕。在所忽畧。而不知昔人已言之。所謂字頭者五音之氣也。字腹者五音之聲也。字尾者五音之和也。詳前五音條²⁷。但君徵之指翁紅煙賢爲腹者正所謂和也。字之尾也。君徵謂今人認腹音爲尾音。唱到其間。皆無了結。此是論今曲之精微處。古人之一唱三嘆。後人之餘音嫋嫋。不絕如縷是也。但乃論曲音之尾。不可呼爲字音之尾也。今舉蕭韻爲例。其宮音純清爲妖。純濁爲爻。是蕭韻之和聲也。但讀爻字。要歸匣母之爻。不可讀爲喻母之遙。其發氣則在齊齒支韻三十六音。一一按之。清濁不爽。如誦驕字。發氣爲基。和音爲妖。蹺字發氣爲谿。和音爲妖。喬字發氣爲奇。和音爲爻。堯字發氣爲倪。和音爲爻。蹺蹺喬堯。角音中閒正聲。以下清濁。一一挨之即得。而蕭韻三十六位。皆得正聲³⁴。誦詩讀書。盡是如此。釋氏謂其教有二合三合字³⁵。儒

25) 『度曲須知』上卷十四葉「收音總訣」に「曲度庚青，急轉鼻音，江陽東鐘，緩入鼻中，模及歌戈，輕重收鳴。模韻收重，歌戈收輕。蕭豪尤侯，也索鳴收。魚模之魚，厥音乃于。皆來齊微，非于是噫。先天寅文，舐舌舒音。舐舌者，舌舐上腭也。寒山桓歡，亦舐舌端。音出優尋，閉口謳吟。廉纖監咸，口閉依然。車遮之音，遏叶平聲。遏入聲爲哀葛切，平聲爲哀奢切。與車遮音絕肖。若問支思，反切醫詩。醫詩切即支思之音。唯有家麻，音切哀巴。」

26) 『礼記』学記「今之教者，呻其佔畢，多其詁。」鄭注「言今之師自不曉經之義，但吟誦其所視簡之文，多其難問也。」

27) おそらく『統韻』【元音】にある「五音」の條を指すであろう。

28) 前掲注24参照。

29) 同上。

30) 『礼記』樂記に「清廟之瑟，朱弦而疏越，壹倡而三歎，有遺音者矣。大饗之禮，尚玄酒而俎腥魚，大羹不和，有遺味者矣。」

31) 蘇軾「赤壁賦」に「客有吹洞簫者，倚歌而和之，其聲鳴嗚然，如怨如慕，如泣如訴，餘音嫋嫋，不絕如縷，舞幽壑之潛蛟，泣孤舟之嫠婦。」

32) 陳氏のいう「宮音」とは喉音を指し，純清は影母，純濁は匣母，喻母は次濁とする。

33) 『因韻』の四声経緯図では第三支韻・第四齊韻の両韻とも齊齒，かつ角音（見・溪・羣・疑母）は各々「基・谿・奇・倪」である。また【元音】四声経緯図ではそもそも韻目が【因韻】とはやや異なり，当該の第三乚韻の角音は「乚・溪・奇・倪」となっており，この説明とは合わない。しかし，『統韻』の韻目では第三支韻のみに角音「基・谿・奇・倪」があり，第四齊韻にはないため，説明は符合する。

34) 声と氣と和と正声との関連については，『礼記』樂記に「凡姦聲感人，而逆氣應之，逆氣成象，而淫樂興焉。正聲感人，而順氣應之，順氣成象，而和樂興焉。倡和有應，回邪曲直，各歸其分，而萬物之理，各以類相動也。」とあるのを意識しているであろう。

35) 鄭樵『通志』卷三十五「六書略・論華梵中」に「華有二合之音，無二合之字。梵有二合三合四合之音，亦有其字。」とある。また，【元音】卷一「通釋上」所収「広華嚴字母」にも「又釋家謂其教有二合三合音，儒家無有。」，卷二「通釈下」所収「三合」にも「僧言釋家有二合三合

家無有。不知儒家少冑識字。亦從古無人精詳論及。

字音者。其實每發一字。俱是三合。有氣有聲有和。其宮之純清純濁。各收本音。基居姑根四韻。發氣與出聲無兩。似二合耳。但發氣之字。發足其氣。而絕無此字之聲。然後出字。乃得正聲。若發氣而認爲字則又有聲。俗謂裝柄。不謂之氣矣。君徵謂幾微之端。有一點鋒芒。似有如無。俄呈忽隱⁽³⁷⁾。眞善形容。夫發氣者也。若誤認君徵之字頭與韻尾爲字音。則誦驕字爲基妖鳴。蹺爲谿妖鳴。喬爲奇爻鳴。堯爲倪爻鳴。驕蹺堯。三十六聲。作何著落。如官人升堂隸役爲政。官人作一木偶。足矣。世上豈有正聲哉。但論曲。則不如此。收鳴收噫諸音。亦天地間自然有此一唱三嘆。餘音嫋嫋者。在也。則是論曲之字。愚又創爲四合之音焉。曰基驕妖鳴。谿蹺妖鳴。奇喬爻鳴。倪堯爻鳴。而後曲者始圓也。以三合之正聲歌曲。不成其爲歌。以四合之歌聲讀書。不成其爲讀。人試一如此歌之讀之。定發大噓也。況乎呼應問答⁽³⁸⁾。出言有章者哉⁽³⁹⁾。以三合字讀書。以四合字歌曲。千古論定。當自今始。又不止此也。長尾鳴。鳴鳴鳴。于。于于于。噫。噫噫噫。併有五合六合七八合矣。昔人謂雅頌之正。鄭衛之淫。豈亦三合多合之殊耶。是未可知也。⁽⁴⁰⁾

以上が「字有三合曲有四合」の文章である。

字、儒家無有。」と、何度かくり返し引用している。

(36) 『元音』巻一「七音發氣」、また巻二「華嚴字母図」(「三合方位正華嚴字母図」)の末尾にも同様の解説がある。「發氣則依基居姑根四韻、收合各歸本宮、清濁四音韻法、全見於此圖、橫貫爲統韻三十六、縱貫爲統母三十六、則華嚴四十二字始開其端。橋李陳獻可定。」

(37) 注22参照。

(38) 『度曲須知』「收音問答」を指すのであろう。

(39) 『詩經』小雅・魚藻之什・都人士「彼都人士、狐裘黃黃。其容不改、出言有章。行歸于周、萬民所望。」

(40) 『礼記』樂記「故聽其雅頌之聲、志意得廣焉。」、『論語』子罕「子曰、吾自衛反於魯、然後樂正、雅頌各得其所。」等。また『礼記』樂記「鄭衛之音、亂世之音也。」、『論語』衛靈公「顏淵問邦、子曰、行夏之時、乘殷之輅、服周之冕、樂則韶舞、放鄭聲、遠佞人、鄭聲淫、佞人殆。」、『漢書』藝文志第十「樂尤微妙、以音律爲節、又爲鄭衛所亂故無遺法。」等あり。また、この部分は『經典釈文』序録の「口以相傳、未有章句、戰國之世、專任武力、雅頌之聲、爲鄭衛所亂、其廢絕亦可知矣。」を意識した表現であろうか。

四 「字有三合曲有四合」における陳氏の論

本章では「字有三合曲有四合」の文章の内容について考察してみる。

陳氏は文章前半において、沈氏が論曲家の観点から自身の『図韻』「四声経緯図四図」を取り上げた『度曲須知』の文章——具体的には「収音問答」——を長文にわたって（厳密には少し文章を前後させて）引用している。冒頭に長文を引用することで、沈氏の説にただ追従するのではなく、韻図（すなわち陳氏の作成した「四聲経緯図」）の利用法に対し、作者として賛同を表明する意味合いもあったであろう。このことは以下の、『元音』未収の『統韻』の文章からも看取できる。

…見口授條下。然愚創言之又自疏之，不如沈君徵代爲疏之詳見盡也。

一方で陳氏には、沈氏の韻図利用法を詳細に紹介したうえで、沈氏の字音分析法（漢字音を三部分に分割する方法）に対して異議を唱え、自説を展開しようという目的もあったとみられる。陳氏が「字有三合曲有四合」の中で、二度繰り返して引用する以下の二箇所は、特に着目すべき点と考えていたようである。

(一)君徵謂今人認腹音爲尾音，唱到其間，皆無了結。此是論今曲之精微處，古人之一唱三嘆，後人之餘音嫋嫋，不絕如縷。

(二)君徵謂幾微之端，有一點鋒芒，似有如無，俄呈忽隱，眞善形容，夫發氣者也。

どちらも字音分析にかかわる内容であり、(一)の方は「今人」が「腹音」を「尾音」と誤認してしまう問題を沈氏が提起した部分、(二)は字頭をどう捉えるかという問題について、沈氏が触れた部分である。

(一)については、「尾音」に対する捉え方を論じており、『度曲須知』では、沈氏のいう「尾音」とは曲を唱う際に、字音の最後尾を伸ばすことにより生じる余韻（あるいは伸ばした音そのもの）を指しているようである。つまり沈氏は「頭音」とはかすかな、認識されづらい音（子音）と捉え、「腹音」が所謂韻母であり、「尾音」は余韻と考えているらしい。陳氏の解釈によれば、

(41) この文章は『統韻』巻一「省括図説」の途中に見られ、「…見口授條下」以前の文は『元音』にも存する。

この沈氏の「尾音」は論曲家特有の説であり、他では用いない方法であるという。このことは陳氏が「字有三合曲有四合」の最後に「長尾鳴。鳴鳴鳴。于。于于于。噫。噫噫噫。併有五合六合七八合矣。昔人謂雅頌之正。鄭衛之淫。豈亦三合多合之殊耶。」と記すことから、「尾音」に対する考え方の違いに注意を促していることが分かる。

次に(二)については、沈氏自身が『度曲須知』で詳しく説明している。

予嘗刻算磨腔時候，尾音十居五六，腹音十有三二，若字頭之音，則十且不能及一。蓋以腔之悠揚轉折，全用尾音，故其爲候較多。顯出字面，僅用腹音，故其爲時少促。至字端一點鋒銳，見乎隱，顯乎微，爲時曾不容瞬，使心浮氣滿者聽之，幾莫辨其有無，則字頭者，寧與字疣同語哉。予向恐世人之認字疣爲字頭也。

「字頭」に関しては、陳氏が『元音』の「字必三合」においても、沈氏の説を敷衍させていることを鑑みれば、一定の賛同の意を示していることが看取されるが、陳氏にとっての字音とは、伝統的な「楽」に対する考え方に基づく「氣聲和」であり、やや観念的な「三合」であって、沈氏の具体的な字音分析とはやや異なる次元の捉え方といえよう。

以上をまとめると、「字有三合曲有四合」の文章では、沈氏の字音分析（字音を頭音・腹音・尾音の三つに分ける法）に異論はなく、「氣聲和」が三合する素晴らしい分析法ではあるが、各部分の捉え方（たとえば沈氏が「尾音」と言っている部分は、むしろ「腹音」の一部と捉えた方がよい等）は、論曲家の立場として沈氏が字音の発声に主眼を置いて論じているものであり、注意が必要である、という主旨が述べられているといえよう。陳氏によれば、曲には独特の字音の捉え方があり、一般的な字音に対する考えとは異なるようである。このことが『統韻』「総目」にある「曲韻」とどのようにつながっているのか興味深いが、当該巻は欠落しているため一切不明である。

(42) 『度曲須知』上巻「字頭弁解」三十七葉表。

(43) 『元音』巻一「通釈上」。「每發一字，必有氣聲和三者，混合成音。而氣則首尾貫足，見前韻母條下。今細疏之，氣先至，過而徐出，將發而爲聲之際，有一點鋒芒，他人若聞若不聞也者。如合口韻，公字若姑，空字若枯，以至戎字若日模之類。…（下略）」とある。

(44) 注(3)参照。

五 結 び

これまでみてきたように、『統韻』と『元音』には異なる部分が少なからず存在する。それらを考察することは、『元音』の成立過程を明らかにするためには不可欠であろうし、陳氏の考えの変遷を知る上でも必要であろう。また、『元音』の編纂意図と利用法、ひいては『字彙』や Morrison の『華英字典』（時に『五車韻府』とも称される）とのつながりにもかかわってくると考えられる。『元音』という書が担う役割を解明することは、当時流行した字書・韻書を知るために大切な作業の一つである。

(本学准教授)

【資料（書名拼音順）】

- 沈龍綏『度曲須知』（據北京大學圖書館北京圖書館藏明崇禎刻本影印）四庫全書存目叢書集部第426冊 齊魯書社1995年
- 沈龍綏『度曲須知』中国古典戲曲論著集成五 中国戲曲出版社1982年11月第4次印刷
- 班固撰・顔師古注『漢書』中華書局1983年6月第4次印刷
- 陳蓋謨『皇極圖韻』『皇極統韻』合帙 河南省圖書館藏
- 陳蓋謨『皇極圖韻』（據河南省圖書館藏明崇禎五年石經草堂刻本影印）四庫全書存目叢書經部第214冊 莊嚴文化事業有限公司1997年
- 盛楓『嘉禾徵獻錄』（據上海圖書館藏稿本影印）四庫全書存目叢書史部第125冊 莊嚴文化事業有限公司 1996年
- 盛楓『嘉禾徵獻錄』（據南京圖書館藏清抄本影印）續修四庫全書史部第544冊 上海古籍出版社1995年
- 陸德明『經典釋文』（據北京圖書館藏宋刻本影印）上海古籍出版社1984年12月
- 趙宦光『六書長箋』續修四庫全書經部第203冊 上海古籍出版社1995年
- 阮元『（重刊宋本）十三經注疏 附校勘記』藝文印書館2001年
- 孔凡禮點校『蘇軾文集』中國古典文學基本叢書 中華書局1986年
- 鄭樵『通志』（據厲有文庫十通本縮刷影印）中華書局1987年
- 陳蓋謨『五車韻府』首都師範大學圖書館藏慎思堂本
- 陳蓋謨『五車韻府』人民大學圖書館藏乾隆二十七年玉衡堂本
- 陳蓋謨『元音統韻』（據山東省圖書館藏清康熙五十三年范廷珣刻本影印）四庫全書存目叢書經部第215・216冊 莊嚴文化事業有限公司1997年

【参考文献（発行年順）】

- 趙焜之（蔭棠）『等韻源流』文史哲出版 中華民國74（1985）年再版本（元は商務印書館1957年初版）

- 耿振生『明清等韵学通论』语文出版社1992年9月
- 馮錦榮「陳蓋謨（1600?-1692?）之生平及西學研究——兼論其著作與馬禮遜（Robert Morrison 1782-1834）《華英字典》之中西學緣」《明清史集刊》第九卷 香港大學中文系2007年9月
- 富平美波「方中履『切字積疑』『等母配位』の条を読む（「切字積疑」訳注1）」『アジアの歴史と文化』第13輯 山口大学アジア歴史・文化研究会2008年
- 孫文良・董守義主編『清史稿辭典』山東教育出版社2008年11月
- 審忌浮『漢語韻書史 明代卷』上海人民出版社2009年11月
- 屈文生「早期中文法律词语的英译研究——以马礼逊《五车韵府》为考察对象」《历史研究》2010年第5期 中国社会科学院
- 封治国「“六大房物”（上）——关于项元汴的六个儿子」《荣宝斋》2013年第3期（总100期） 中国美术出版总社
- 彭于綸「陳蓋謨音學思想之研究——以《皇極圖韻》和《元音統韻》為主」國立高雄師範大學國文學系碩士論文2013年
- 王松木「因數明理——論陳蓋謨《皇極圖韻》的理數思想與韻圖設計」《文與哲》第二十三期 國立中山大學中國文學系2013年12月
- 浦山あゆみ「陳蓋謨『元音統韻』をめぐって—『皇極統韻』との比較を中心に—」『文藝論叢』第83号2014年10月
- 万献初「《五车韵府》文献源流与性质考论」《文献》2015年第3期 北京图书馆出版社